

Letters A r p a k

レターズアルパック

VOL.215 ISSN 2432-5295

旅

C O N T E N T

- ◆【旅】…01
- ◆今、こんな仕事しています…05～08
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙
 - ・グリーンインフラを巡る
 - ～ドイツ・北イタリア・スイス～



旅の楽しみに「写真」を挙げ
る人は、多いの
ではないでしょ
うか。私も旅先
にカメラは欠か
せない方です。
仕事に就いたば
かりの20数年前
は、給料の多く
をカメラや大量
のフィルム、「自
宅暗室」でのプ
リント用の薬品等に費やし、いそいそとカメラ片
手に出かけていました。
時代は変わって、デジタルカメラが登場して以
降、写真は「撮り放題」となり、現像・プリント
しなくても画面で写真を楽しむことができるよう
になりました。おかげで現地調査しながら、旅に
出た時もその癖が抜けず、バシャバシャと撮りま
くることがなくなってしまいました。
旅は「非日常」を体験する機会でもあります、
旅先で撮る写真はそういったいつもの風景や身近
なものの「違い」や「差」を感じ、記録する手段
のひとつでもあるかと思っています。
たくさん写真を撮影できるようになったこと
はカメラ好きにはうれしいことですが、旅先から
帰って写真を見た時に、ブレブレの写真や何を考
えて撮ったのか思い出せない写真があることも：
時代は変われども、基本に立ち返り、「違い」
や「差」、「いいな」と思う気持ちや感じる心を大
事に、旅や写真を楽しみたいものです。



北九州市旦過市場

東京での最後のツアー サスティナビリティマネジメントグループ／伊藤栄俊

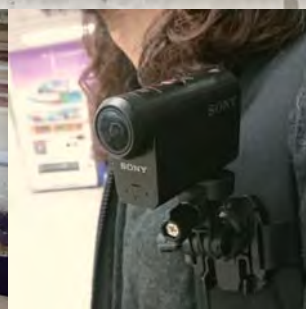
先日のGWの10連休は膝を痛めたのと天気の関係で自転車でのツーリング（旅）は途中で断念してしまいました。今回は、昨年11月に行った東京での最後のツアーについて報告します。
東京は東北や北関東方面へのアクセスがよく（どこへでもアクセスはよいのですが）、金曜日の終電や土曜日の始発を使って、東北・北関東方面へ何回もツアーに行きました。
今回の行程は、鬼怒川温泉から北上し、会津田島、会津川口を経由し、10年以上前から行きたかった本名室谷林道を経由し、燕三条まで抜ける、というものです。本名室谷林道は、ツーリングマップルには「県境の絶景峠 奥会津側の眺望抜群！」と記載があり、通ったことのある知り合いからも、ネットで調べても、いい林道と言われています。林道自体は全長約40キロメートル、そのうちダートが約18キロメートル、標高差も800メートル以上あり、かなり走りごたえのある林道です。
当日は、天候にも恵まれ、早朝は霧の中の暗い樹林帯を、標高を上げるにつれ日も上がり、霧は眼下の雲海に変わり、北側に御神楽岳を眺めながら、文字通りの絶景となりました。
京都に戻ってきてからも地図を開けば、いくつもツアーの計画が思い浮かび、計画ばかり増えていきます。機会を見つけ、いろいろな場所に行こうと思っています。



ふたりたび 都市・地域プランニンググループ／稲垣和哉

今回の旅もそうですが、どこかに出かける時はあまり調べ過ぎないように、そして予定を決め過ぎないようにしています。泊まる場所や見ておきたいところを数カ所、とりあえずピックアップする程度です。タスクが決まっていると何か息苦しいですし、天気や体の調子などその日になってみないと分からないことも多いので、ほどほどの計画であとは当日の流れに身をまかせてみます。
ひとりたびとは違って自分の思い通りにはいきませんが、ふたりだからその制約条件や予想外の展開があるように思います。今回のようにそこに面白さがあるとするならば、それを楽しめるゆるさをこれからも持ち続けたいなあと思います。

「たび」というテーマですが、休みなどはあまり外に出かけず、家でゆっくりとしていることが多いです。そんなインドアな私ですが、このGWは同居人とふたりで数日の旅に出ました。行き先はしまなみ海道です。
2日間かけて尾道から今治まで自転車で向かう予定でしたが、蓋を開けてみるとパンクの対応から始まり、腸炎による止まらない〇〇、負傷サイクリストの介抱・搬送など、ハプニングの連続で、結局予定の半分程度しか進めませんでした。ただ、いま振り返って思うのは、そのハプニング自体が旅の思い出になっているということだ。



たびの必需品。GPS ロガー（左）とアクションカメラ（右）。時間をあけてふり返ってみるといろいろな発見があります。

人や出来事との思わぬ出会いがあるからこそ、「旅」は強烈な印象と記憶を植えつけ、

「旅」の裏テーマは「偶然」です。かつて、ステイブ・ジョブズは「すべて、偶然にまかせよう」とメッセージし、赤瀬川原平は「世

が問われていると考えています。今号は「旅」にまつわる小文を寄せてもら

※ ※ ※



JRの1駅分の切符で関西一円をぐるりと乗車できる旅をご存じでしょうか。20年ほど前、「JR大回り乗車の旅」の新聞記事を見た母に誘われて、一緒にチャレンジしたのが始まりで、以来、運行ルート表とお気に入りの書籍を片手に友人と一緒に、または一人で旅を楽しんでいます。ルートは、主に「和歌山・奈良」、「滋賀」の2つを利用しています(いずれも京都駅乗車、東福寺駅下車)。

■和歌山・奈良まわり…京都→新大阪→大阪→天王寺→和歌山→五条→高田→桜井→奈良→木津→東福寺

■滋賀まわり…京都→山科から近江塩津→米原→草津→柘植→加茂→木津→東福寺

この大回り乗車の旅、違法ではありません。「大都市近郊区間特例制度」を活用して、次のルールで回れます。

①大都市近郊区間内で利用(乗る駅と降りる駅も同様)、②普通乗車券と普通回数乗車券で乗車する、③途中下車はできない、④経路は自由であるが同じ駅を重複できない。などなど

乗車には、ICカードを利用すると時間制限がある、切符がお薦めです。また、運行ルート表は、駅員さんに聞かれた場合、「大回り乗車」の説明のために用意しておきます。初めて乗る路線や車窓の風景は格別で、たった140円でのんびりと贅沢な旅を楽しむことができます。もちろんご当地駅弁も楽しみの一つです。

さて、大都市近郊区間は、東京、新潟、仙台、福岡にもあります。行くまでの交通費がかかるので実行に移していませんが、東京では1都6県の旅ができるそうで、想像するだけでわくわくしてきます。いつかチャレンジしようと思っています。鉄子の道は、まだまだ続きます。



しょうか。そんな偶然の出会いを求めて、周到に旅の準備をする(あるいはしない)ことも楽しいものです。

撮影を通してまちの魅力を感じる 建築プランニング・デザイングループ／塗師木伸介

歩き回って様々なシャッターチャンスを探したところですが、その場に留まり、場に馴染むことが大切です。広場などで地元の人と同じように腰掛け、ゆったりとチャンスが訪れるのを待ちます。

そして、すれ違う人や目があつた人に積極的に現地の言葉で挨拶するようにしています。意外と気軽に答えてくれ、写真も撮らせてもらえることもしばしばです。また挨拶を通して、気軽に挨拶を返してくれるまち、声をかけづらいまち等、まちにおける人々の距離も感じ取ることもできます。

簡単なことなので、みなさんも実践して頂き、まちの人と心の距離を少し近づけてみてはいかがでしょうか。そのまちの魅力を更に感じる事が出来るはずですよ。



私はまちのスナップ写真撮影が趣味で、旅に出た際は一日中写真を撮りながら歩きまわっていることが多いです。綺麗な景色だけではなく、まちの空気感や人々の生活を感じられるような写真が撮れればと思い撮影をしています。

しかし、ただカメラを向けているだけではどこか距離感のある写真となり、良いものは撮れません。現地の人ときちんとコミュニケーションをとりながら撮影することが大切です。私がその際に心がけていることとしては、「一箇所に長い時間留まる」と「極力現地の言葉で挨拶をする」の二点です。

の中には偶然に満ちている」と記しました。都市や地域のまちづくりに関わる私たちには、そんな偶然を、日常の中にもいかに仕組むか

訪れた先の日常を垣間見る旅 地域再生デザイングループ／羽田拓也



自分ではきっと到達し得ない旬の食べ物とお店(冬の八戸にて)

日常を離れ、非日常を体験するために色々なところに旅に出ます。いわゆる観光名所などを巡るのも楽しいですが、最近では、地元の方を通じてその土地の日常に触れることが楽しみの一つになっています。

おすすめの地元のお店に連れて行っていただき、お店の人から教わる地元産の新鮮だからその食べ方や旬のもの、都市部には出回っていない日本酒などを楽しみ、まちのことなどをお聞きする。そうしたことは地元の人からするとごく普通の日常であっても、私にとってはその場所その時でしか味わえない非日常空間の体験になり、かけがえのない旅の思い出として残っています。(だいたいそういうときは写真を撮るのを忘れてしまいます)

逆に大阪を訪れる友人に対しても外から訪れた人だけではなかなか行かないまち(大正や鶴橋などディープなエリアなど)を案内し飲み食いするようにしています。そうすることで単に「大阪の友人と会う」だけではない、大阪の魅力を感じられる時間を過ごしてもらえたら、と思っています。

いました。ここには各人の個性に満ちた「旅」との向き合い方があります。

レターズ・アルバック編集委員会

建築を観る旅

建築プランニング・デザイングループ／間瀬高歩



投入堂（国宝）
1995年8月筆者撮影

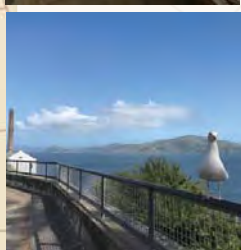
この旅以後、長期間の旅はできていない。いつの日か、山・海を歩き、建築・都市を巡る、旅をしたいと考えている。

いまから二十数年前の夏、名古屋以南の社寺仏閣、城郭、近代から現代の建築を観るため、関西、中国、九州、沖縄へ一箇月ひとり旅をした。道中では三徳山三仏寺を参拝したことが今でも鮮明に記憶に残っている。ここでは当時の記憶を基に三仏寺投入堂について記しておきたい。

鳥取県中央部に位置する霊山、三徳山は706年の開山。修験道の開祖とされる役小角えんのおづめが開いたとされている。修験道は神道と仏教が融合したもので、山を神仏そのものとして敬う山岳信仰のこと。受付で緊急連絡先の記帳を済ませると輪袈裟を手渡され、情報が少ない当時の私は、社寺を見学しに來ただけなのに記帳と輪袈裟は何事かと疑問に思ったが、その理由は直ぐに分かった。修行の場であるため輪袈裟は略式の法衣、登山中は首から掛けて修行の身だしなみを整えなければなら

脱獄不可能の孤島・アルカトラズ島

公共マネジメントグループ／丸井和彦



た島に連邦刑務所が置かれたのは1934年。島を取り巻く海流の速さと海水温の低さから、泳いで逃げるのが難しいためアル・カポネをはじめとする凶悪犯が多く収容されていました。別名『ザ・ロック』。

繁華街からほんの2.4キロメートルの距離にあるため、島はまちのどこからでも見えるシンボリックな存在です。もちろん、島から大都会が見渡せるため、受刑者はまちの夜景を見ながら、自らの罪を悔い改めたのかもしれない。

刑務所は1963年に閉鎖されましたが、当時の独房も、重々しい空気はそのまま。その後政治活動家によって占拠されましたが、現在は国立公園事務局が管理しており、鳥類をはじめとする野生動物の保護が行われています。

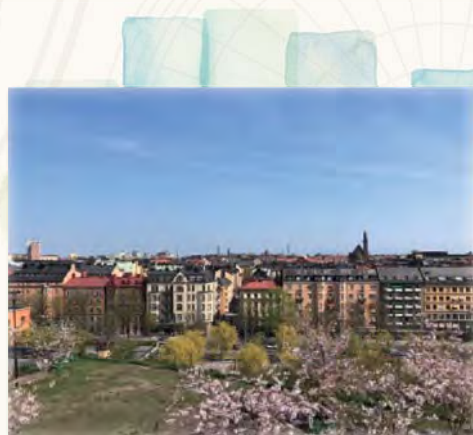
華やかなダウンタウンが「光」だとしたら、ここはまるで「影」ともいえる場所。サンフランシスコの影の記憶を受け継ぐ場所になっているのだと感じました。

人類の悲劇や死を対象とした観光を、ダークツーリズムと言います。私自身チェルノブイリやアウシュビッツなど、さまざまな箇所を訪れています。



何度でも行ってみたい！遠いようで実は近い「北欧」

地域再生デザイングループ／山道未貴



建物はカラフルでも意外と屋根が黒いストックホルムのまちなみ

「とりあえず北欧に行ってみよう！」という思いで、GW期間中に6泊7日の日程でスウェーデンとフィンランドに行ってきました。特にフィンランドは、日本人にとっても人気の観光地であり、行く先々で多くの日本人と出会いました。

どちらの国も、空港から中心部まで電車で約30分というアクセスの良さ。中心部に行くと、徒歩圏内に様々な観光スポットがあり、気づけば毎日2〜3万歩、歩いていました。

北欧の街並みは、クラシカルでありながらモダンな雰囲気漂い、その絶妙なバランスは、とても調和がとれています。また、北欧は冬の季節が長いからでしょうか少々寒くても、オープンテラスでビールを片手に太陽の光を浴びている住民の姿が印象的でした。しかし、地元の方は、あまりおつまみや食事を口にしないのか、ひたすらビールやワインを飲んでいよう、夕食探しは、とても苦労しました。

新人紹介

地域への深い旅を



遠藤真森
地域産業イノベーショングループ

兵 庫・大阪の住宅地育ちです。農業とはあまり縁のない暮らしでしたが、自然好きであったことと、農村地域の維持・活性化が重要だと感じたことから、大学は農学部に入學。農家の野菜の種採りや地域固有資源の保全・活用について研究していました。

卒業後はある意味（格好良く言えば？）、旅のような生活をしていました。初めて関西を離れ、関東で数ヶ月過ごした後、神山町を中心に徳島県で半年以上、地域活性化コーディネーターの訓練をしていました。徳島への長旅は私の生き方・考え方に大きく影響しています。この旅で学んだ、地域の現場や人の想いを深く知ることの重要性を忘れることはありません。

今後は、現場の想いを活かした「持続可能な地域づくり」への貢献のために精進していきます。また、そのための気づきを得る旅も積極的にしていきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

兵

兵庫県赤穂市で育ち、進学を機に愛媛県松山市で過ごし、この春から京都に住んでいます。学生時代は「まちづくりを学ぶ」ことに関して研究していました。まちづくり学習の授業設計を行い、受講者が座学やまちづくり活動の実践を通して、まちづくりを学んでいくプロセスを明らかにしようとしてきました。

旅の中では、観光で時間を消費することよりも、地域の暮らしの一端に触れることを大事にしています。徒歩やバスで移動したり、目的地まで少し遠回りしながら、路地に入ったり、坂をのぼったりします。そんな寄り道の中で見つけた小料理屋さんに入って、その地域の食材や料理、お酒を楽しみながら、常連さんや大将と話すのが、旅の醍醐味だと感じます。遠回りや寄り道も楽しみなが、様々な仕事に取り組んでいきたいと思っています。これからよろしくお願いいたします。

寄り道を楽しむ



小川直史
地域再生デザイングループ

はじめての場所



長谷川育世
都市・地域プランニンググループ

愛

知県の稲沢市出身で、就職を機に大阪へ引っ越して来ました。大学では、建築を学びました。建物を建てることで地域にどんないいことがあるのかということを重ねて設計に取り組んでいました。学んでいくうちに、建築そのものよりも地域全体の方へ関心がいき、研究室では都市計画や景観について学びました。

大阪での新生活は、どちらかといえば、楽しみよりも不安の方が大きい中で始まりましたが、見知らぬ土地を歩いて回るのは、少し旅をしているようで、とても楽しいし、わくわくします。初めての場所へ行った時や旅行へ行った時には、そこで雰囲気の良い喫茶店や美味しいコーヒーのお店を探すのが楽しみの一つでもあります。

そんなまちを歩くのが楽しくなるような、まちづくりをしていきたいです。まだまだ勉強することばかりですが、どうぞよろしくお願いいたします。

原

本取引の不思議な世界について修士論文にしたためた後、日本貿易保険というところで2年間国際経済と政治の微妙な関係性を楽しみ、このたび転職してまいりました。

沢登りが好きなので、自分にとって旅と言えはやはり沢です。

沢登りの最中は基本的に疲れるわ怖いわけで嫌なことが多く、危ないところを登攀している時にはもうこんなことはやめよう、これで引退しようと思うこともしばしばです。が、困難な沢ほど下山した時の喜びも抜群で、苦難の記憶も大体美化されてしまうため、まだ細々と続けるはめになっています。

人生で最難の沢は屋久島の宮之浦川というところで、110メートルの龍王の滝をはじめイベント満載、その分危険もいっぱいでした。降りてきて民宿でトラップVSクリントンのニュースを見ながら飲むビールが最高においしかった記憶があります。

沢メン募集中



盛川正和
サステナビリティマネジメントグループ

商業エリアの価値向上（リ・ブランディング）に取り組んでいます

絹原一寛：

都市・地域プランニンググループ



吹田 VillageMart（5月より毎月開催予定）

昨年度より、大阪府の「商店街等エリア魅力向上事業」で、空き店舗増加、活力衰退に悩む商業エリアの支援に取り組んでいます。

商圏の構造変化や消費者ニーズの変化、Eコマースの台頭など商業エリアを取り巻く環境は一変。もはや個別の空き店舗対策や一過性のイベントでは立ちゆかなくなっているなか、「いかにして必要性が低下したまちに、新しい価値を創造するか」をテーマに、昨年度はJR吹田駅南エリア、JR四条畷駅周辺エリアを支援しました。

芦原橋アップマーケットをはじめ様々なエリア再生で実績を上げてきた株式会社サルトコラボレイティヴの加藤寛之さんと協働で取り組んでいます。

特設サイトを開設してアルバックホームページからもリンク

よく「商店街の空き店舗を何とかしたい」という話を聞きますが、空き店舗対策は「目的」ではなく「手段」。本当に大事なのは、そのエリアを訪れたい、利用したい、お店を出したい……というような魅力、価値を生み出すことだとつくづく感じています。

今年度は大阪市港区の朝潮橋駅周辺エリア、柏原市の国分駅西側エリアを支援します。新しい価値が生まれるよう、地元の方と取り組んでいきたいと思っています。



なわてリング

丹波市の持続可能なまちづくりに向けて 丹波市市民活動支援センターが10月に開設予定！

戸田幸典：

地域再生デザイングループ



修了式での記念写真
（修了生・アドバイザー・事務局）



研修は受講生自らが考える時間・実習として学ぶことを重視

持続可能なまちづくりに向けて、地域自治の力が改めて重視される中、特に、課題となっていることは、その支援のカタチではないでしょうか。

丹波市では未来都市創造審議会を中心に、「まちづくりビジョン」の検討が進められており、アルパックが策定を支援しています。その中の1つの柱でもある「住み慣れた地域に住み続けられるまち」の実現に向けた重要な要素として地域自治が位置づけられています。また、「自治協議会のあり方懇話会」が設置され、「自治基本条例」等に基づいた、今後のあり方についても検討がなされているところです。

丹波市は10月に大型商業施設ゆめタウン内に開設する「市民プラザ」の1機能として、地域自治によるまちづくり、市民活動を支援し、そのハブとなる市民活動支援センターをオープンする予定です。

昨年度、このセンターの担い

手も想定した市民活動の中間支援人材の育成業務を受託し、県内の地域支援に実績のあるメンバーとともに、半年間計100時間の研修を企画・運営しました。研修では、理念・考え方・知識だけでなく、市や県内の状況を現場で理解する機会を設け、市内における中間支援とは何か・必要な仕組みや事業を考えながら、様々なスキル習得も目指しました。3月には修了発表会を終え、受講生5名全員が活躍が期待されています。

さらに、今年度から2年間、センター開設準備・運営業務にも携わることとなりました。修了生を中心とした地元スタッフと市職員とともに、「各主体とセクターをつなぎ、アウトリーチを大切にする」、「みんなでつくり・育てる」、「縦割りを超え、地域づくりを支援する」をコンセプトに、各地域にも出かけていきながら、運営していく予定です。

今後、様々な形でセンターに参加できる機会を用意していく予定ですので、ご関心がある方はご連絡ください。10月にはオープンニングイベントも実施予定です。

伝統を活かした空間に「御杖村営住宅」

増見康平：

建築プランニング・デザイングループ



【外観】外壁：杉板貼（御杖産）・漆喰左官仕上



【広い玄関】腰壁・床：杉板張（御杖産）、壁：漆喰左官仕上、土間：豆砂利洗出
に、人の活動であふれるにぎやかな地区が形成されることを願っております。

移住者やU・I・ターナー者、単身・子育て世代を問わず、幅広い層の定住を想定した全5棟の御杖村営住宅が竣工しました。

御杖村は奈良県の最東部に位置し、冬季の積雪が多く、総人口約2000人のうち約半数が65歳以上の高齢者となっている。この地域で住宅を計画するにあたり、住民の方から、御杖での暮らしぶりや、住まいの理想・アイデアをいただき、御杖ならではの住宅のあり方について検討しました。外観は伝統的な御杖の住宅の特徴を備えつつも、内部は現代の人でもストレスなく生活できる新しい住宅というコンセプトのもと、大きく3つの特徴で木造平屋（2LDK）の住宅を計画しました。

①外観

伝統的な御杖住宅の特徴である山並み・街道と平行した棟方向とし、主屋は平入りとし、また、シンプルな切妻屋根の軒先を延ばして軒下空間を広

く確保するとともに、御杖産木材や漆喰等の伝統的な素材を用いました。

②広い玄関と土間

約2.5坪の大きな玄関は、来客を迎える接客の場であったり、作業スペース、色々なもののストックヤードであったりと、外部と内部の中間的なスペースとして活用されることを想定しました。また降雪の多い地域なので、軒下の土間空間で自動車からキッチンの勝手口への動線を確保しました。

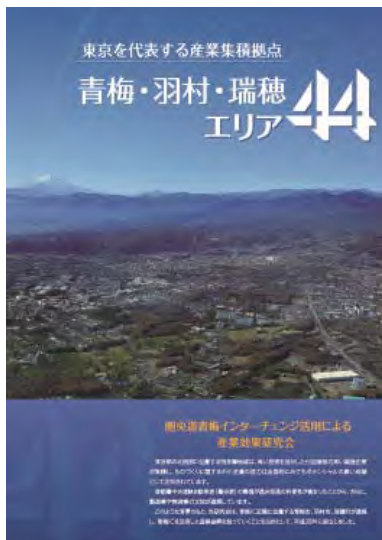
③プラン

御杖の伝統的な住まいに見られる田の字型プランのような一体的な空間を目指し、廊下のないプランとしました。また、個室の1つを比較的大きくし、入居者の生活に合わせて部屋を2つに区切って利用できるように、開口部の位置に配慮しました。また、1つの敷地に5棟の住宅が建つ集住に対する利点として、こどもたちが遊び、入居者の交流が生まれるコミュニティスペースを設けました。入居者の自然の中での豊かな生活が送られるとともに、人の活動であふれるにぎやかな地区が形成されることを願っております。

競合から連携へ—近隣自治体が連携しスケールメリットを活かした企業立地促進を探る

貴船律子：

地域産業イノベーショングループ



青梅 IC 番号「44」に因んで名付けられた「青梅・羽村・瑞穂エリア44」紹介パンフレット



連携モデル事業として、「産業交流展 2018」に共同出展

近年、首都圏では高速道路や主要幹線道路の整備が進み、周辺地域における、工業団地や物流・商業施設の立地が活発になっていきます。

そのため、幹線道路に近い自治体では、企業から用地の引き合いがあっても、紹介できないといった課題も生じています。その一方で、沿道や周辺の地域とは競争環境にあることから、自治体の企業立地政策及び企業立地促進の取組がさらに重要となっています。

そのような中、首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の青梅ICに近接する、青梅市・羽村市・瑞穂町の二市一町が連携して取り組む産業立地促進に向けた事業を2016年から三年に渡って、お手伝いしました。

当事業では、二市一町による研究会を設置し、当該地域の企業の実態・立地魅力を分析する

調査や未利用地調査、圏央道周辺地域の動向・自治体の立地促進策の調査等を実施し、産業立地促進のあり方を検討、連携モデル事業を実施しました。

連携メリットとして、一体となった経済圏としての産業振興が図れることがあり、具体的には情報発信力の向上や誘致対象地域の拡大、既存施策・事業の効果の向上等、スケールメリットが享受できることが明らかとなりました。例えば、企業の留置策の一つとして開催する研究会も合同で開催することにより、参加者の増加や活発な企業交流につながります。

今後は、当事業で作成した未利用地リストを活用しながら、連携して企業誘致に取組んでいくことになっていきます。さらに、商工会や商工会議所も巻き込みながら、持続的取組につなげていくことが次のテーマとして期待されます。

みんなのき黄檗こども園の増築棟「楓舎」が完成しました。

塗師木伸介：

建築プランニング・デザイングループ



園舎外観。楓の木が2階デッキを貫いている



2013年にアルパークで設計監理をさせていただいた園舎横への増築を担当しました。

約170平方メートルの小さな園舎ではありますが、定員増への対応と共に、将来的には地域の人との交流や学童保育等の多様な展開を見据える、夢の詰まった園舎です。

園舎は木材をふんだんに使用し、大きな柱や梁が表しとなっています。子ども達に建物の成り立ちを見せることをコンセプトの一つとして設計を行いました。樹種も栗や樺、松、杉と様々なものを使用し、子ども達がい間近に感じることが出来るようになっています。

また、施工者さんのご好意により、園児向けの加工場の見学イベントを実施し、これか

ら建設される園舎を誰が、どのようにつくっているかを園児たちに体感してもらうことができました。

1階の保育室は緑豊かな屋外2面に対して大きく開くことが可能で、開放的に利用出来るようになっていきます。2階では屋外デッキ部分を既存の楓の木が貫いており、建物内から眺め、また、木に直接近づくことが出来ます。この木は園舎名の由来ともなりました。園庭は庭師さんのアイデアにより、実のなる木や里山に生える草木を植えた園庭となっています。

子どもたちが園舎内部にある大工さんの技によって加工された木材から、周辺に広がる草木や土ままでの様々な要素に日常的に触れ合いながら活動を展開していただければと思います。

※本業務は建築プランニング・デザイングループの山崎も担当しています。



木材をふんだんに使った内部空間

「日本遺産シンポジウム 家康決死の逃避行—影で支えた伊賀・甲賀の忍者たち—」を開催しました

江藤慎介：

地域産業イノベーショングループ



藤田達生教授と和田竜先生の対談

「忍者の日」(2月22日)の翌日にあたる平成31年2月23日(土)、滋賀県甲賀市で「日本遺産シンポジウム」が開催されました(当社及び日本旅行草津支店が協業で事務局を行いました)。

忍者の発祥地である伊賀市・甲賀市は、平成29年に「忍びの里 伊賀・甲賀—リアル忍者を求めて—」として日本遺産に認定され、本シンポジウムはその普及啓発を目的としたものです。

当日は、「忍びの里」のテーマのひとつである「神君伊賀甲賀越え」にスポットを当て、藤田達生三重大学教育学部教授の基調講演「忍びの国と神君伊賀・甲賀越え」では、伊賀市・甲賀

市が「忍びの国」となった背景や、関係史料に基づく神君伊賀・甲賀越えの3ルートについてご紹介いただき、その歴史や魅力などをご講演いただきました。続いて藤田教授と、『のぼうの城』『村上海賊の娘』で知られる小説家和田竜先生の基調対談「『忍びの国』の魅力」が行われ、天正伊賀の乱を題材とした和田竜先生の作品「忍びの国」を中心に、伊賀忍者・甲賀忍者の魅力等について話が盛り上がりました。

最後に地元の観光関係者等が登壇し、神君伊賀甲賀越えの観光ルートとしての魅力等について、パネルディスカッションが行われました。

当日は甲賀市・伊賀市の市民を中心に、400名以上の方々にご参加いただきました。日本遺産や文化財を活用した観光振興は、その専門性から困難さが指摘されますが、多様な切り口と想像力で、ワクワクする物語を描けることをシンポジウムで紹介いただきました。この成果を今後の取組につなげていきたいと思っています。



「ジョーのある町・尼崎」 —平成最後のお城「尼崎城」が開城！—



原田弘之：
地域産業イノベーショングループ

「たつんだ！ジョー」の声援を受けて、平成31年3月29日、尼崎に新しいお城がオープンしました。

もともと尼崎城は、大坂夏の陣の後、江戸幕府が大坂を直轄地として西国支配の拠点とするために、譜代大名戸田氏鉄に築城させたものです。当時は甲子園球場の約3.5倍にも相当する、3重の堀、4層の天守があつたそうです。しかし明治時代になると、役割を終え廃城されました。

その後、尼崎城を再建したいという話があつたのですが、平成27年11月、旧家電量販店（ミドリ電化）の創業者である安保証氏から、創業の地である尼崎において尼崎城を建築するため、10億円を超える私財を市に寄附する意向が示され、さらに市民からの寄附も集まり再建に至ったのです。

今回再建されたお城は4層5階建てで、1階はショップ等、2階は幅10メートルのスクリーンのVRシアターや、侍になって斬りまくり、狙撃手になって鉄砲を撃ちまくる「侍道場」もあります。3階には、甲冑をはじめ、殿様やお姫様、忍者にも変身できる「なりきり体験ゾーン」が、4階は尼崎にまつわる展示、5階は展望ゾーンで、江戸時代の尼崎城下町の様子と共に、尼崎の街並みが一望できます。

当社は平成30年度に、尼崎城を中心とするエリアのマーケティング戦略の策定に関わりま

した。その内容は明らかにできませんでした。策定過程で次のような話がありました。姫路城は、世界遺産で国宝だからわざわざ観に行く、大坂城は大阪のシンボルで太閤秀吉のゆかりもあり遊びに行く。では尼崎城は何をめざしてわざわざ行く場所にするのか。尼崎城周辺には、お城だけではなく、大規模な商店街や寺町、銭湯、飲み屋など特に外国人に人気の高い日本文化を体験できるコンテンツがコンパクトに集積。しかも尼崎は、電車で梅田から10分、なんばから15分程度の非常に近い場所に立地。大阪に集まるインバウンド客や日本人をいかに尼崎城のエリアまで来てもらうか。それが尼崎城開城2年目以降の大きな課題です。まずはみなさんも一度、おいでください。

※本業務は、地域産業イノベーショングループの江藤、水野も担当しています。



大規模災害に備える災害廃棄物処理計画の策定が進んでいます

長沢弘樹：
サステナビリティマネジメントグループ

「天災は忘れた頃にやってくる」と言われます。災害はいつ何時起こるかわからないので、その備えを常日頃から忘れないようにしようという戒めの言葉です。

阪神・淡路大震災以来、日本列島に大規模な震災が増えています。また、地球温暖化の影響で、水害を引き起こす集中豪雨が今後さらに増えるとも言われており、災害対策が重要となっていることは間違いないです。

アルパックでは、十数年にわたり災害廃棄物処理計画に取り組んでいます。昨年度は、千葉県成田市で災害廃棄物処理計画を策定しました。災害廃棄物は、災害が原因で発生する粗大ごみや、がれき、津波堆積物などの総称で、地域の復旧、復興の妨げとなることから迅速な処理が求められます。しかし、阪神・淡路大震災で災害廃棄物が国内の一般廃棄物の年間発生量の約4割近い2000万トンも発生し、その収集や処理に大きく手

間取つたように、いざ災害が発生すると、一度に多量に排出される災害廃棄物をどのように収集し、環境負荷の小さい適正処理を行うかなど、さまざまな課題が現れます。そうした課題にあらかじめ備えるのが災害廃棄物処理計画です。

その後、東日本大震災で、さらに広域にわたって廃棄物処理が滞ったため、広域処理に必要な法的枠組み等が強化されました。現在、自治体には、災害に備えた事前の対策を更に重視する形で災害廃棄物処理計画を作ることが要請されています。

今回の成田市の計画では、地震と水害とを想定して災害廃棄物発生量を予測し、3年以内に処理を完了するためのプロセスや、そのための手続き、留意事項等を整理し、計画にとりまとめました。どんな災害が起こるかは誰にもわかりませんが、大規模な災害にも対応できる基本的な枠組みを示すものとなっています。成田市は、国内最大の



出典：災害廃棄物対策フォトチャンネル
(http://kouikishori.env.go.jp/photo_channel/)

国際線利用者を誇る成田空港が立地しており、大規模な災害にも迅速に対応できるまちとして、今後も発展を期待しています。

旅のもてなし方～文化財のポリシーとアクション

“文化財”と言うと難しそうですが、元々は、私達の身近で、楽しいモノやコトなはずです。

先ず“文化財”を守る～誇りという財産

4月8日、学士会館での日本ナショナルトラスト(JNT)の創立50周年記念式典で、創設当初からの「永久会員」を代表して感謝状を頂きました。JNTは1968年(昭和43年)12月25日、イギリスのナショナル・トラストに倣って設立されました。当初は、「財団法人観光資源保護財団」と称していました。

戦後、日本国民にとって大きなショックは、法隆寺金堂壁画の焼失。1949年1月26日でした。輿論が巻き起こり、議員立法で「文化財保護法」制定。1950年8月29日に施行されました。因みに9月20日には、京都市民は、京都だけに適用される「京都国際文化観光都市建設法」を住民投票で制定しています。戦後5年、まだ連合軍占領下で、日々の糧にも餓えていましたが「文化」に誇りを託したのです。この「文化財保護法」は、包括的・総合的且つ体系的で、世界に冠たる法律です。

時代相を読もう～それは闘いである

人間がやること、何事にも、光と影があります。1960年代に入ると、経済成長で、暮らしは良くなりましたが、自然や文化の破壊も起きました。明日香村は大阪の通勤圏に入り、住宅開発が押し寄せてきました。京都では双ヶ岡で、宅地開発騒動が起こり、国会でも問題になりました。急速で大規模な改変への対処が課題でした。

1966年、議員立法で「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」いわゆる「古都保存法」が成立しました。明日香村は全村、保存地区に指定され、国営飛鳥歴史公園が造られました。

税金には限りがあり、間に合わないこともあります。1964年、鎌倉で、鶴岡八幡宮の裏山、御谷に宅地造成計画が持ち上がり、作家・大佛次郎さんはじめ市民が立ち上がり「財団法人鎌倉風致保存会」を結成し、お金を集め、1.5haの土地を買収しました。1974年、和歌山・田辺の県立自然公園地域の天神崎で、別荘地開発に対して市民が「天神崎の自然を大切にす会」を結成し、計画地を買収しました。これらは、日本版ナショナル・トラストの始まりと言われています。

新しい光と影～国民のチェックを受けるべし

イギリスでは、19世紀中頃、貴族が税金対策で資産を売り、多くのカントリー・ハウスが壊されました。ジェントリの運動で、1895年にナショナル・トラスト(NT)が創設されました。ピーター・ラビットの原作者・ビアトリクス・ポターが寄託したヒル・トップや、元首相・ウインストン・チャーチルの邸宅チャートウェル・ハウスも維持運営しています。1907年にナショナル・トラスト法が出来、今や、会員450万人、1万余の職員を擁し、800miの海岸、248,000haの土

地、500以上の城館・モニュメント等を所有しています。法制が整うと、「大事業化」の弊害が起ります。英国政府は、1983年、イングリッシュ・ヘリテージ(EH)を設立しました。公的機関です。有名なストーンヘンジも管理しています。

都市づくりとともに～小集団のアソシエイツ

アメリカは内務省国立公園局組織法が始まりです。国立公園局(NPS)は、1872年、世界初のイエローストーンをはじめ、59の国立公園を含む、約400のユニットという小単位の集合である国立公園システムを管理しています。特徴は、独立革命の戦跡も所管していることです。ワシントンのリンカーン記念堂とその前のプールも管理しています。1950・60年代、アメリカでは富裕層が郊外へ移り、都市の空洞化が進んでいました。都市計画屋にとって都市再開発の情報はエキサイティングでした。スラムクリアランスです。結果、都市に刻まれていた歴史的文化資産が失われていきます。市民が運動を起こし、1966年、連邦政府は、国家歴史保存法を制定し、国家歴史登録財制度(HRHP)で、NPS管理の文化財を含め、100万以上が登録されました。

「文化」を引き寄せよう～愉しく、面白く

明日香村はどうでしょうか。立派な国営公園が出来ても人口は減っています。古都保存策だけでは住民の暮らしや商売までカバーできない。2018年7月の改正文化財保護法に注目します。“「総合計画」・「文化財保存地域計画」”の“総合”がクセモノです。

“文化財を活かす”のは、ストレートなゼニ儲けだけではないと思います。昔から身近な小さいコミュニティで、生活や経営を支援し、学習するシカケがありました。祭りや踊りなどで伝えてきました。明日香村には、飛鳥坐神社のお祭。愉快的な奇祭、御田植神事(おんだ祭)もあるではないですか。文化財保護法にも明日香村のホームページにも書けないでしょうが。

地域資源を守り生かし、なりわいと地域自治のワザとチエを鍛える「演習」です。役人や学者に掛かると、万事、難しくなります。日本ナショナル・トラストで言えば、北白川伊織町の駒井邸、明日香村では、小学校、みんな地域のコミュニティセンターにしては。文化を身近に引き寄せましょう。京都府庁旧本館利活用も小さな奉仕活動の「総合」です。応援ネットの会議は、企画から評価までし、すごいアーティストも生まれてきます。



看板の赤いマークはイングリッシュ・ヘリテージのマーク

近況 & イベントのお知らせ

「ワクワクする船場のこれから 2030 提案コンペ」 始まります！

中井翔太

都市・地域プランニンググループ

2016 年 7 月、大阪事務所が船場に拠点を移したことを機に、船場のまちづくりに関わらせていただいています。

ちょうどこの時期、船場では、活動団体のプラットフォームとして活動していた「船場げんきの会」を中心に、地域連合振興町会、法人企業や商店街等が連携協力する船場地区全体の窓口組織として“船場倶楽部”が立ち上がりました。

近年、船場ではマンションやホテルの建設ラッシュが続き、新たな居住者が増加するとともに、これまで見られなかった観光客等の来街者がまちなかで見られるようになりました。“船場倶楽部”は、新たな大阪の都心像を探るとともに、船場が「ワクワクする」魅力的なプロジェクトを誘発する場となり、共にまちを盛

り上げていける仲間を集めたいと考えています。

そこで、“船場倶楽部”では、

- ・概ね 10 年先の 2030 年を想定した「ワクワクする船場」のイメージ
- ・「フツフツとわきあがるプロジェクト」のアイデアを募る「ワクワクする船場のこれから 2030 提案コンペ」を実施することとなりました。

応募条件に国籍、年齢、資格等は不問です。みなさま、是非、ご応募ください。

<https://www.sembacompe.net/>



焼き鳥屋@新大宮広場

嶋崎雅嘉

地域再生デザイングループ

今、まちの中の空き家・空き空間の活用事例として注目されている京都市北区にある「新大宮広場」で一日限定の焼き鳥屋を開きました！当日は、普段からお世話になっているいろんなまちの方々にご来店いただき、まちづくりの話題に花を咲かせた素敵で濃密な時間を過ごすことができました。

新大宮広場は、充実したキッチンとそれを取り囲むカウンターがつくる空間の雰囲気が素晴らしく、調理器具や食器も充実しており、素人料理人の私も、創作意欲が沸いてきていろんな料理をつくることができました。来ていただいた方々から「私のまちに

もこんな場所がほしい！」「また、ここで食事会とか企画したい！」といった声が上がりました。

「新大宮広場」のように、様々な人が利用できる「まちの居場所」は多くのまちで求められていますが、特に「キッチン」が持つパワーは魅力的であることを実感しました。さらに、新大宮広場のキッチンは営業許可をとってありますので、何かと便利なのです！

全国的に、キッチンのある「居場所」「レンタルスペース」が増えてきているようですので、皆さんのまちでも利用してみてもいいでしょう！

「新大宮広場」

<https://shin-omiyahiroba.com/>





1軸11tのトラックにも耐えられる道。道のそばには搬出された材木や薪などがいたるところに用途別に現場で仕分けされ積まれている。

中川貴美子・畑中直樹：
サスティナビリティマネジメントグループ



ま
ち
か
ど

グリーンインフラを巡る ドイツ・北イタリア・スイス

日本でも、気候変動や人口減少・高齢化等に対応した持続可能な地域社会の形成といった課題への対応の一つとして、昨今、「グリーンインフラ」の取り組みを推進することが盛り込まれています。

この春に、グリーンインフラに取り組む持続可能な地域づくりに取り組んでいるドイツ（シュバルツバルト、フライブルク）、北イタリア（マジョーレ湖）、スイス（アンデルマツト）を視察してきました。その旅の中から、ドイツの森林に関する取り

組みをご紹介します。

ドイツの森林を案内いただいた、フォレストターのランゲさんは、「グリーンインフラ」とは「グリーンにアクセスするインフラ」と解説され、森林の中の道は、木材搬出等のための単一用途だけでなく、人がそこに行き、「観光業として活用するための道」、「虫被害等を監視する道」、土場等の「作業をする場」と多機能であり、かつ年中使えることを前提に設計されているとのこと、「自然」だけでなく、「人」が基本となっています。

また、森林も単層林としてしまうと、虫被害や需要の変化により資産価値を下げるリスクが高めてしまうので、リスクを低減し、出来るだけコストをかけずに資産（森林）価値を高めるために、自然の力を活用しているとのこと、環境という視点ではなく、経済との直結している思想が印象的でした。ドイツでも、日本同様の鹿被害はひどく、フォレストターの仕事のひとつとして鹿を駆除し、天然更新する森にするための管理も仕事のひとつのようです。

道には、搬出された木材がいたるところに積載されていました。現場で建材用、パン窯等の薪用、チップ

プ用と分けられていました。経済的に利用できる背景として、地域にそれぞれ利用する事業者が立地し、地域の中でお金が回る仕組みになっています。農林業の生業が地域の景観をつくり、観光業としても人口以上の人が訪れているとのことでした。道中立ち寄った村では、イースターのお祭りに向けた展示の準備を公園でされていました。



途中立ち寄った村。イースターのお祭りにむけた、村民の手作りの展示。展示物にも植物や薪・チップなどが普段に使われている。

なお、ランゲさんはこの数十年間ご自宅で薪ボイラーを活用されていましたが、燃やすのはもったいないからやめて、木はマテリアルに、そしてこれからは太陽の力を最大限に利用して生活していきたいとおっしゃっていたのも印象的でした。

視察先以外でも随所に、自然の力を最大限に利用していくための、人間側の知識・知恵や試行錯誤がうかがえました。グリーンインフラを活用していくためには、自然の力だけでなく、「人間」の力も試されています。

表紙写真：手荷物が出てくるのを待つ空港職員（メルボルン・タラマリン空港／撮影 坂井信行）



「レターズ アルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック（株）地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F

TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F

TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所 〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F

TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所 〒810-0802 (株)よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

ホーチミン 0908.CJ Building.2-4-6 Le Thanh Ton street. District 1 HCMC.Vietnam (ベトナム)

TEL+84(028)6255-6732



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。